


4. 本時の展開

子どもの思いや活動の流れ	成果と課題
<p>○給食『サケごはん』で使われたサケの皮(実物)を提示 サケの皮だ。匂いがする。パリパリしているね。</p> <p>○<u>チェプケリ</u>(実物)、<u>チェプウル</u>(写真)を提示</p>  <p>こんな靴をはいていたんだ。 ザラザラしているよ。 私たちの靴とは違うね。 クマやシカの靴の方が温かそうだな。</p> <p>なぜアイヌの人たちは、サケの皮で靴や服を作っていたのかな？</p> <p>・考えをワークシートに記入後、全体での話し合い</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 45%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ サケ = 神に感謝して ・ もったいない ・ 身近なものだから ・ 皮まで使い切るから </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 45%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 他の自然 ~ 鹿、熊… ・ 季節にあった材料を使っていたから ・ 必要な分だけ捕っていた </div> </div> <p>サケも他の自然のことも大切に考えていたから、皮まで服や靴の材料に使っていた。人と自然の共生を目指していたんだ。</p> <p>今の自分たちの生活を、振り返ってみると…？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ストーブや電気のつけっぱなしなどがある。 ・ 自然がなければ生きていけない。 ・ 私たちは、もう少し自然を大切にしないといけない。 ・ アイヌの人たちの生活を、見習っていききたい。 <p>環境問題について、もっと詳しく考えてみよう！</p>	<p>※学校給食という身近な具体物を用い、子どもたちが興味・関心をもつことができた。</p> <p>※チェプケリに実際に触ってみることで、匂い、手触り、重さなど実感を伴った活動を行うことができた。</p> <p>※既習のアツシや熊の皮で作られた靴や服と比較することで、「なぜサケの皮でも…？」という問題意識を生むことができた。</p> <p>※「サケを大切に」「むだなく使う」という見方や考え方が話し合いの中心となった。</p> <p>※季節感や狩猟方法・集めやすさ等、他の自然についても様々な視点から考えた発言が続き、話し合いに広がりをもたせることができた。</p> <p>※電気や資源のむだづかい等、今までの生活と比較して振り返ることができたが、子どもたちの生活経験をより具体的に想起させる手だてが必要であった。</p> <p>※次時以降、一人一人のこだわりを生かした探究的な活動を行っていく。</p>

5. 実践を振り返って

北海道洞爺湖サミットとアイヌ文化について問題意識をもたせ、具体物(チェプケリ等)を通して、今日の自分たちの生活も省みることをねらった本時の学習。

身近で実感的かつ具体的な追求の場面を構成したことにより、学級全員で同じ課題を共有することができ、話し合いを深めることができた。

4学年で学習したことをもとに見方や考え方を深めていこうとする子どもも多かった。また、「アイヌの人たちってすごい」「むだのない生活、見習わないといけない」「自然(環境)を大切にするアイヌの考え方は今の自分たちにも共通している」「自然を上手に利用しているアイヌの人々」「未来のことも考えて…」など自分ごととしてとらえようとする子どもたちの姿もあった。

前学年との積み重ねや系統性を考慮しながら、今後も各学年・教科との関連を意識した実践を継続して行っていきたい。



松前藩の参勤交代から アイヌの人たちとの交易へ

小学校 6年 社会

実践者 青柳 吉乗 (札幌市立信濃小学校)

海道松前藩を追求の糸口に、身近で実感的かつ体験的な思考・判断を生む教材化

1. 教材化について

北海道に住む私たちにとって、アイヌ民族の歴史や文化から学ぶべきことは多い。その正しい理解と認識を深める中で、人間尊重の精神を学ぶことは、現代社会に生きる6学年の子どもにとっても今日的課題といえる。

江戸時代、「石高のない大名」として例外的な存在であった松前藩。

子どもたちには、5学年の時に田植え・稲刈りの体験学習をしたことや、修学旅行で実際に函館山から津軽海峡を見渡したこと等の経験がある。

松前藩も参勤交代を課せられたという事実から、江戸幕府の大名統制の厳しさに気付かせたい。さらに、当時の大名は、領地の農業生産を基盤にした政治を行っていたが、松前藩の経済力を支えていたのは、アイヌの人たちとの交易であったことにも気付かせ、追求を進めさせたい。

松前藩が参勤交代したか否かのディベート的な話し合いから、アイヌの人たちとの交易へ

2. 単元構成について

「松前藩は参勤交代をしたのか」という選択型の討論の場を構成し、子どもの意欲的な追求を図っていく。教師から提示する具体的な資料を精選しながら、問題をできるだけ自分ごととしてとらえるよう手だてを講じたい。写真や地図、VTR等の効果的な活用を通して、「松前藩とアイヌの人たちとの交易は、対等なものではなく、不平等や不公平なものであった」という事実につなげたい。

《単元の流れ》

三代将軍家光の『生まれながらの将軍』発言

江戸幕府265年・安定のしくみ
江戸幕府の支配体制について調べよう

<その1> 参勤交代

かかる日数や費用は… 目的は何だろう 大名配置から徳川幕府の支配力が見える

北海道(蝦夷地)は?

松前藩も幕府の支配下に <本時>

<その2> 鎖国

貿易の相手を中国とオランダに限定 貿易地を九州長崎の出島だけとし、貿易の利益を独占

<その3> 朝鮮通信使

《参勤交代》と《鎖国》を関連付けながら《朝鮮通信使》をとらえていき、江戸幕府の安定を具体的な3つの政策という視点から追求していく。

本単元では、三つの歴史的事象(=参勤交代、鎖国、そして、朝鮮通信使)を取り上げ、これらを具体的に調べることを通して、江戸幕府の政治が安定したことが分かるようにすることをねらいとした。

本時では、その参勤交代における不公平な交易に対して、<幕府の立場><松前藩の立場><アイヌの人たちの立場>という三つの立場から、それぞれ多面的に考えさせる場も設定し、追求を深めていきたい。



3. 本時の目標

松前藩も参勤交代した事実から、江戸幕府による政治の安定をとらえるとともに、その背景には「松前藩とアイヌの人たちとの不公平な交易に支えられていたこと」に気付き、当時の交易の意味を問い直すことができる。

4. 本時の展開

子どもの思いや活動の流れ	成果と課題
<p>○「松前城」…写真の提示 <small>小さな城だね。道南の松前町、サクラで有名な観光地。</small></p> <p>○VTR視聴 <small>7月の修学旅行で行った函館山だ。 津軽海峡をこえて青森県が遠くに見えたね。</small></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> こんなに遠くて小さな大名の松前藩も参勤交代したのかな？ </div> <p>・自分の予想とその理由を明確に</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>【した】 幕府の厳しい命令。例外なく北海道（蝦夷地）にも。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>【していない】 石高がない、米の収穫ができない。雪や寒さ。江戸まで遠距離。</p> </div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 米の獲れなかった松前藩はどのように収入を得ていたのかな？ （松前藩の経済力は？ =石高ゼロの松前藩のなぜ= </div> <p>○教科書と社会科資料集の活用</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 10px 0; text-align: center;"> 全国各地にまで政策を徹底させようとする家光の強い権力が浮き彫りに。松前藩とアイヌの人々の交易。「不平等」「不公平」「不利な条件」とは！？ </div> <p>○補助資料の提示 VTR視聴 「シャクシャインの戦い」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 幕府の力が北海道にも及んでいた。アイヌの人たちとの交易によって松前藩の財政が支えられていたが、その実態は対等と言えるものではなかった。 </div>	<p>* 意外と知られていない松前城、北海道にも藩が存在していたことにも驚きの子どもたち。</p> <p>* 札幌と函館、そして津軽海峡、さらに江戸（東京）という距離感をとらえることができた。</p> <p>* 前時に大名配置（親藩・譜代・外様大名）について理解していることが前提となった。</p> <p>* ディベート的な話し合いの場から、根拠の明確な発言が続いた。 【した】という事実を知った子どもたちに「稲作のできなかった松前藩がなぜ？」という問題意識をもたせることができた。</p> <p>* アイヌ民族の歴史や文化に関する参考文献は子どもたちに多少難解であり、容易に入手できないという点もある。視聴させたVTRは、NHK『堂々日本史』の番組を編集したものである。</p> <p>* 教科書と社会科資料集を読み取らせ、＜幕府＞＜松前藩＞＜アイヌの人々＞の三つの立場からも考えさせた。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>「刀をさした商人」とも言われた松前藩。 もともと松前藩は、アイヌの人たちから得た産物を、本州の商人たちに売りさばいて、収入を得ていました。松前藩が交易を独占するようになると、アイヌの人たちと各地で、トラブルが相次ぐようになりました。松前藩が、一方的に、物々交換の比率を取り決めるようになったのです。松前藩との交易は、アイヌの人たちにとって、とても不平等なものになりました。たとえば、かつては、鮭100本に対して、2斗（と）のお米と交換してきました。ところが、同じ鮭に対して、わずか半分以下のお米としか松前藩は交易に応じようとはしなくなりました。米を減らされては困ると訴えるアイヌの人たちに対して、松前藩は、その訴えをまったく聞き入れようとはしませんでした。</p> <p style="text-align: right;">NHK『堂々日本史』の番組より</p> </div>

5. 実践を振り返って

「アイヌの人たちがいないと松前藩は成り立たなかったのに、すごくひどい。なぜ松前藩はそんなことをしたのか」「この交易を幕府はどう思ったのかが気になった。松前藩のずるさはいつまで続いたのだろう」「人をだましてまで交換したことは本当によかったのか。アイヌの人たちに感謝をするべきなのに」などの感想があった。

4学年では主に「自然との共生」「独自の文化」という視点からアイヌ民族を学習してきたが、6学年における本単元（歴史単元）で、はじめて差別問題を知り、考えていくことができた。今後（政治単元や中学校での歴史分野・公民分野等）につながる内容であった。

Ⅲ 研究の成果と課題

具体的な資料を基にした教材開発

1. 研究の成果

(1) アイヌの人たちの願いに迫る活動や体験から、共感的・実感的な理解へ

4学年の実践ではアツシの作り方を教材化し、「自然との共生」を理解させることをねらった。子どもたちは木の模型の皮をはがす体験から、木も自然の一部であり自然と共に生活していたアイヌの人たちの考えについて話し合った。また、ゲストティーチャーの言葉から考えたことを検証し、自分も自然の一部というアイヌの人たちの考えを理解していくことができた。

5学年の実践ではチェブケリを教材化し、「自然との共生」から環境について問題意識をもつことをねらった。子どもたちは4学年での学習経験などから、自然を大切にするアイヌの人たちの考えを話し合い、「自然との共生」という視点から自分たちの生活にある環境について問題意識を高めていくことができた。

6学年の実践では、松前藩の参勤交代を教材化し、「松前藩とアイヌの人たちとの不公平な交易」について考えさせることをねらった。子どもたちはVTRや地図、資料などから、当時の社会状況やアイヌの人たちとの交易の様子について理解していった。また、差別問題についても触れ、人権教育という面からも考えていくことができた。

具体物や資料等を効果的に提示したり、ゲストティーチャーとの交流をしたりすることは、アイヌの人たちにおける「自然との共生」を子どもたちに気付かせていく上で有効であり、共感的・実感的な理解につなげることができた。

(2) 前学年の学びをつなげる、系統的な学習構成の工夫

三つの授業実践では、4・5・6学年と、発達段階に応じた系統的な学習内容となるよう、「札幌市教育課程編成の手引」に基づき、指導計画を構成した。

4学年では単元構成に活動的な内容を盛り込み、体験から「自然との共生」について考えを導き出すことができた。5学年では具体物や資料、視聴覚機器を用いて「自然との共生」から現代の環境問題に考えを結び付け、新たな追求の糸口としていくことができた。6学年では視聴覚教材や資料を用いて、松前藩とアイヌの人たちとの交易から人権問題に目を向けていくことができた。

4学年で学んだ「自然との共生」を5学年でも既習として追求の財産とし、6学年での「人間尊重の精神」の学習につながる、系統的な学習の構成を設定することができ、前学年で培った見方や考え方を更に高めていくことができた。

発達段階に応じた系統的な学習の構成

2. 今後の課題

今回の三つの実践から、二つの課題が明らかになった。

一つ目は、小学校での学習を中学校へどうつなげていくかということである。小学校段階で学んだ「自然との共生」「人間尊重の精神」について、中学校でどのように系統立て取り組んでいくか、今後の課題としていく必要がある。

二つ目は、外部指導者との連携・協力の充実についてである。4学年の実践では札幌市ウタリ教育相談員の松平さんをゲストティーチャーとして招き、学習を深めていくことができた。アイヌの人たちの交流や歴史や文化に触れる学習のより一層の充実を図り、子どもたちに体験からアイヌの人たちの文化や考え方を学べるよう、関係団体との連携・協力を進めていくことが重要である。

小・中学校での系統的な学習の構成を

アイヌ民族の生活や文化に触れる学習の一層の充実を

【参考文献・視聴覚資料・施設等】

- ・「アイヌ民族の歴史・文化等に関する指導資料第5集」 札幌市教育委員会
- ・札幌市ウタリ教育相談員 松平 智子（南区小金湯27 電話：011-596-3690）
- ・アイヌ文化振興・研究推進機構（北1西7プレスト1・7 電話：011-271-4171）